

うものである。

過労と発疹チフスで倒れる

私は、終戦以来、居留民会で昼も夜も東奔西走で心身の疲労その極に達しているところに発疹チフスにかかり、二十一年四月に倒れたが、加療よろしく一命をとり止め、七月引揚げに病床から這い出し、家族と入場光太郎氏に付添いねがい、コロ島、佐世保を経て、七月末、郷里小松市に引き揚げた。時に私三十八歳、家内歌子三十七歳、長男繁忠十五歳、長女睦子六歳、二男義則四歳の五人家族であった。

引揚以降

郷里に引揚げて以来、健康回復、二十一年十一月より露店商で古物商開業に家内が担当、私は県当局に折衝して、恩賜財団同胞援護会石川県支部の設置にこぎ着け、私は小松市の担当者となって引揚者、戦災者へ援護物資の頒布事業を始めた。

なお、昭和三十年から小松市議会議員となり、六期二十四年間つとめ、勲四等の受章に浴した。また長きにわたり、引揚者同盟石川県支部副会長として援護活

動につとめたことを認められ三池信理事長と中西陽一知事より感謝状を受く。当年八十三歳である。

あれから四十五年

岐阜県 後藤 英子

昭和二十年八月十五日、満州チチハルの社宅でたった一つ残ったラジオの前に社宅の人達が集まって聞いた「終戦の詔勅」のすすり泣きの声が伝わって来た。戦争に負けた。これから我々はどうなるのだろうか。

それからの私達の生活は逆転した。幸いなことに、主人は軍関係の自動車の会社勤めていたため、召集は免れた。社宅には、奥地から逃げてきた開拓団の方達を入れるため、二、三家族同居することになった。窓には板を打ちつけ、鍵は厳重に閉め、一步も外へ出られない。それでもソ連兵や中国人(満人)が鍵をこわして侵入し、目ぼしい物、特にソ連兵は時計、万年筆を欲しがって盗って行った。一年間の恐怖の生活、

天井裏へ声をひそめてかくれたこともあった。ある団体で「五歳以下の子供は殺せ」等といった所もあったらしい。又銃をつきつけられ「ピストルを持っていろいろ、出さんと殺すぞ」には血の気が下り、一瞬何も言えなかった。水道は出ない、電気はつかない、水は井戸まで汲みに行ったが、零下三十度にもなる冬は井戸の囲りが、こぼれる水が凍り、山のようになって、滑って危なかった。燃料の確保も苦労した。生活費は元の会社はソ連に没収されたが、雇ってくれたので、いくらかは助かった。

二十一年八月二十三日、「日本人は三日以内にチチハルから立ち退け」という命令が出た。日本に帰れる、という喜びと私の故郷をこんな形で去るといふ淋しさで心は複雑だった。着られるだけの衣類を着て、何日かかるかわからない道中の食料、乾パン、干し飯、干したパン、ニンニクの味噌漬等を厚い布で各自家族に作ったリュックサックにつめた。二歳と四歳の子供にも自分の分をつめ背負わせた。その時私は七か月の身重の体だったので、途中で生まれたときのことを思い、

赤ん坊の物一揃いを持った。

八月二十六日朝もやの中を一同は荷車に乗って駅へ向かった。待っていた汽車は無蓋車だった。入れるだけつめ込まれ、ハルピンに向かって出発した。照れば暑く、降れば下着までぬれ、停車するとかけ下りて草むらで排泄の用をたし、満人の略奪に会い、鉄道の破壊された所はぞろぞろと歩いた。皆に遅れまいと必死で子供の手を引いて歩いた。ハルピン、新京、その他何度か収容所に入れられ、畳一枚のスペースの土間に寝起きし、給食は粟のおかゆだった。これは子供が下痢をして困った。一か月余りかかってコロ島に着いた。この海に向こうに日本があると思うと心が明るくなった。検疫消毒、頭からDDTの粉をまっ白にかけられ、いよいよ乗船となった。大きな貨物船の船底だった。ここでも畳一枚分が一家族だった。給食は高粱のおかゆとうすい汁。船中で病気で亡くなった方は水葬にした。博多に着き、又検疫、消毒の後、上陸。別府に両親がいたのでたどりついた。惨めな姿で、でも無事を抱き合って喜んだ。そして次の朝、私は長男を出産し

た。今その長男も高校教師となり、そこに私が安住しているところである。

妻子は生死不明、私はシベリアへ

岐阜県 古 関 民 夫

父親の猛烈な大反対を押し切つて、昭和十八年五月、大陸で思う存分に活躍しようと、目的の開拓団へと向かいました。関釜連絡船で釜山から満州ハルビンへ地図を頼りにハルピン駅より牡丹江駅行きの列車で一面坡駅で下車、徒歩で通河県庁を目ざして歩きつづけ、夜は星の方角を確かめながら、見渡すかぎり原野。五月とはいえ満州はまだ寒く、歩きつづけて三日目で現地の人の部落に助けを求め、手話で事情を説明し、了解してくれた。粟のおかゆをご馳走になり、その時のおかゆのうまさは今でも忘れない。

部落の人びとは皆あたたかく親切であった。ここで一泊して、朝早くから馬車でなお北へと向かつて行く。

突然川幅の広い大きな川岸に着き、ここで小船で、川の向う側が、通河県県庁とのこと、ここまで、無料で送り届けてくれた。大きな川は、松花江であった。

まず県庁へ行き、満州国三江省通河県大古洞開拓団入植の書類を見て、役所の人びとが、よく一人で来られた、こんなことは初めてだ、と言って喜んでくれた。県庁では、今日は一泊して明日は隣の小古洞開拓団の船がくるから、それに乗船して行くようにと親切に説明をした。

小古洞港の一つ手前の清河鎮港で下車し、近くに日本人経営の郵便局と大古洞開拓団案内所があり、ここで日本を出発して以来いろいろな難儀をしてようやく到着したことを話した。

さつそく本部から迎えが来て馬車にゆられながら、約一時間半ぐらいで、本部に到着した。団長を始め、本部の方々が、大勢で大歓迎をしてくれ、思わず嬉し泣きをした。その日は本部で一泊した。

私の行く部落は、約八キロの所で、大古洞開拓団八州部落とのこと、いよいよ今日は八州部落へと向か